

# 大久保長安による桐生新町の計画思想に関する基礎的研究\*

## Basic Research on Planning and Design Concept for the Kiryu-shinmachi of Nagayasu Oukubo

稲村晋佑\*\* 中川三朗\*\*\*

By Shinsuke INAMURA, Saburo NAKAGAWA

### 1. はじめに

近年、歴史性・文化性豊かな市街地にかつての賑わいを取り戻そうとする試みが全国各地で展開されてきている。また、改正文化財保護法や景観法の施行によって伝統的建造物群保存地区制度や文化的景観などにおいて、町並みが文化財として評価され保存や活用されるなど、かつての雰囲気や伝わるような空間を活かしたまちづくりが各地で進められている。こうした歴史ある市街地のまちづくりが順調に進められるためには、本来ならばその地域の持つ歴史性や文化性を正しく理解し、認識した上でまちづくりにそれを活かす必要がある。

しかし、現在のまちづくりでは町並み景観の保全や本来の町並みに戻す修景事業などが中心に進められている。町並みを修復する前に、その基礎である町割の重要性を考える必要がある。そのためには、まちの特性をはじめ、まちの形成プロセスを把握することも当然必要であるが、まちづくりと計画の概念から、誰によって、何のために、なぜ計画されたのかなどのように、改めて町割の計画意図などを探る必要があると考える。

対象地として取り上げる群馬県桐生市の桐生新町は、歴史的町並みを活かして重要伝統的建造物群保存地区選定（重伝建）を目指して今もまちづくり活動が盛んに行われている。現在も町割が人々の生活の一部として根付いている地区である。また町割が計画され、現在まで残っていることには、代々その地に住んでいる人々の親しみや愛着があってこそ残っていると考えられる。戦災の焼け野原からの復興や戦後の高度経済成長の時代の考えによって、社会的にも町割が変化する要因はあった。

しかし、建築年代の統一性がない建物が点在している地区だが、町割は生活に密接に関わりがあ

\*キーワード：計画思想、大久保長安、桐生新町、土木史、都市計画史、町割

\*\*学生員 足利工業大学大学院都市環境工学専攻

\*\*\*正会員 工博 足利工業大学都市環境工学科教授

(栃木県足利市大前町268-1、

Tel:0284-62-0605、Fax:0284-64-1061)

りがあり残っている。残っているということは、町割を計画する時に何らかの意図があり、それが現在にも精通する計画思想だったのでないかと仮定することができると思う。

そこで本研究では、現在残っている文献や絵図を用いて桐生新町における大久保長安の町割の計画思想について考察することを目的とする。

### 2. 研究の定義

#### 1) 計画思想の定義

ハワードの田園都市論<sup>1)</sup>やガルニエの工業都市論というような、都市の全体的なイメージやコンセプト、計画背景などを計画思想と定義する。

#### 2) 町割の定義

現在の都市計画で、既存の町を新たに区割りしなおし、用途区分の設定も実施した町の区画を町割という。計画思想は一般的に定義されていないが、本研究ではある特定の人物や組織が考えた計画のデザインやコンセプト、および計画意図の事を定義する。

### 3. 桐生新町計画に参加した人物

#### 1) 大久保長安

大久保長安は、天文14年(1545年)に甲斐武田氏の猿楽衆大蔵太夫の子として生まれ、蔵前衆(代官)を勤めた。武田氏が滅びた後、徳川氏の家臣に取り立てられ、関東入国後は代官頭となり、榊原康政のもとで家臣団の知行割・領国内の検地にあたった。

慶長8年(1603年)に、幕府奉行衆(老中職)の一人に加えられ、家康の駿府政治の一翼を担った。自ら各地を巡視し直接指揮をとる一方、駿府・江戸から書状により指示を与えた。山地と平地の接続したところに位置する八王子・青梅・桐生の町創設や、石見・佐渡・伊豆の鉱山開発、東海道・中山道・甲州街道の宿駅整備、江戸・駿府・名古屋の築城など、信玄堤などの建設にも技術を発揮したことを受け治水・鉱山・築城の技術に手腕を発揮し、幕府財政の礎を築いた。慶長18年(1613年)に駿府で死去した。長安の地方支配は、武蔵八王子の陣屋を拠点として、各地に出張陣屋をつくり、手代を派遣して支配にあたらせた。

## 2) 大野八右衛門

尊吉は、武蔵多摩郡横山村で生まれた。天正 18 年 (1590 年) に徳川氏の代官頭大久保長安の手代として、桐生領の地へ派遣された。天正 19 年 (1591 年) に新町の町立てとして慶長 3 年 (1598 年) に桐生領の検地を行っている。

## 4. 対象地域の概要

徳川家康が江戸幕府を開いた時代の代官頭大久保長安が町割をしたと言われている、群馬県桐生市の桐生新町を対象地とする。

桐生市は群馬の東部に位置しており、「西の西陣、東の桐生」と言われる程の絹織物の盛んなまちとして知られている。当時の絹織物に関係する、町並みや近代になってのジャカード機などが普及してからの機械制工業の時代の織物工場や、洋館、近代水道施設などの多くの近代化遺産が市内に点在している。また、現在でも絹織物は行われているものの、近年はパチンコや自動車産業を中心とした機械産業も盛んに行われ、パチンコ台の生産においては全国トップシェアを誇っている。また歴史を活かしたまちづくりを平成 12 年から住民主体のまちづくりを展開してきている。

## 5. 基礎調査の実施

### 1) 調査概要

歴史を活かしたまちづくりを進めている地域には、既存の文献や調査報告書など資料が多く存在している。今回対象地とした、群馬県桐生市は市史の他に共に織物で栄えた街であるため、織物関連の史料も多く存在している。また陣屋に関する文献や、代官や手代に関する江戸幕府における組織について書かれている文献<sup>5) 6)</sup>もある。江戸時代の様子を伝える絵図の存在も確認できている。また、桐生市では重要伝統的建造物群保存地区を目指している背景から既存の建造物調査の報告書<sup>7) 8) 9)</sup>もある。

そこで本研究における対象地の基礎調査として、既存の文献や絵図を対象として史実の把握における基礎調査を行った。

### 2) 調査対象

既存研究や歴史的町並みに関しての地割計画当時の記載がある文献や絵図を全て対象として調査を行った。調査場所にある文献において、史実の記載されている文献と併せて、当時の様子を空間的に把握できる村絵図や地割絵図なども調査対象とした。

### 3) 調査結果

#### ①町割の成立

天正 18 年 (1590 年) に桐生領は徳川氏の蔵入

れ地 (天領) となった。これまで黒川山中を含む桐生領五十四か村域は、柄杓山城を本拠とした由良成繁氏の支配下にあった。由良成繁氏は、後北条氏に味方したため常陸牛久へ国替えとなり、徳川氏の代官頭大久保長安の支配地へと替わる。同じ年に、長安の命を受けて桐生領を支配するために派遣された手代大野八右衛門は、由良氏の支配していた頃の城下町 (久保村町屋) が桐生領の触元として規模が小さく手狭であるため、荒戸原に新町を作って町屋を移すことを考えた。この際に計画されたまちが桐生新町である。

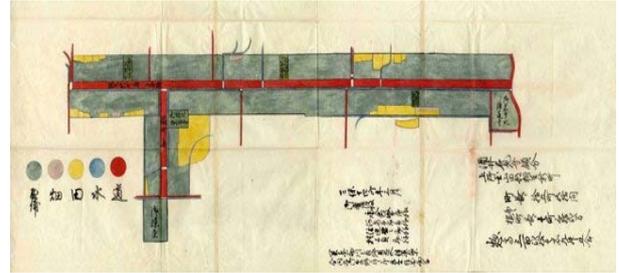


写真-1 桐生新町通・横山町屋絵図 (桐生市立図書館所蔵・書上家文書) 天保 14 年

桐生新町における主軸となる道は、桐生新町の町割がされる以前の荒戸原扇中央部には、北から南にかけての通路があった。これは、由良氏の支配下であった時代に弟が城主として支配していた新田金山城との往来が頻繁となった際に、由良氏が支配していた旧桐生氏の居城であった柄杓山城 (隠城) からの近道として、当時からあった美和神社沿いの道を避けてつくられたと言われている。主に新田金山との物資の輸送経路は、桐生川・渡良瀬川・新田堀を経て舟運を利用していた。また桐生川に面した下瀬堀には舟渡場があった。桐生新町は、当時の近道を主軸に町割が行われているところが伺える。由良氏支配時の久保村町屋とは別に、陣屋を設けて町割を行っている。

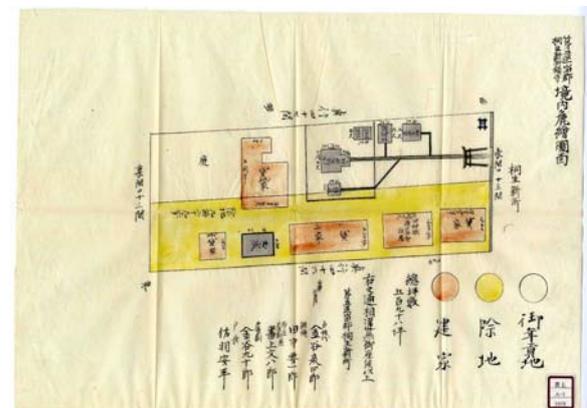


写真-2 桐生新町鎮守境内絵図面 (桐生市立図書館所蔵・書上家文書) 明治 5 年

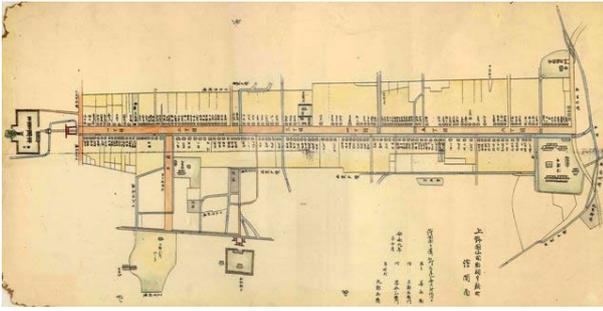


写真-3 桐生新町絵図（桐生市立図書館所蔵）  
安永9年

②大久保長安・大野八右衛門による計画の記録

久保村峯（現寂光院境内）の丘陵を削平し、陣屋を作って拠点とした。新町の町割は、荒戸原の通路を上げ五間とし、その両側を間口六間、奥行四十間に縄張りをして、短冊状一軒前の屋敷とした。通路の西側に一町三十二間の通路をつくり陣屋への通路とした。周囲の町境には、高さ五尺ほどの土居を築いて郭（くるわ）とし、通路の西側へ用水路を開削した。

水路は、桐生川右岸の久保村大堰を取水口とした。二丁目・三丁目境の雉子ノ尾（きじこのお）で左折して村域を流れ桐生川へ抜けている。天正19年（1591年）に新町の町並みが整ったところで、由良成繁の再興した久保村鎮守の梅原天神社を赤城ノ森へ移した。これが現在の天満宮である。

当初は一丁目・二丁目の五町余りであったが、慶長10年（1605年）に雉子ノ尾を基点として南へ十一町余、下瀧掘までの町並みを整え、三丁目・四丁目・五丁目・六丁目とした。すなわち、桐生新町の設立初期は、一丁目・二丁目と横町で構成されていたということになる。そして、通路西側の用水路を下瀧掘まで開削した。この水路は、村域を流れ下瀧掘へ抜けている。町割りを広げた時に、新宿村から五丁目へ天台宗長福寺を、六丁目へ浄土宗浄運寺を移している。新町から隣接する地への移動はすべてにおいて橋が架けられていた。

③町割成立当時の人々の生活

大野八右衛門は、町立てされた在郷町へ支配下の村々から、子供二人以上の世帯では、そのうち一人を移住させたり、近郷からの入権者を募ったりして、戸口の増加を図った。そのため、住民の権利は旧住者も新来者も同等であり、排他の傾向は見られない。すなわち、住民間の階級もゆるやかで、常に新興の気風に満ちていたと考えられる。

④市（いち）などの賑わい空間の存在

桐生領五十四か村の領民は、慶長5年（1600年）の関ヶ原合戦の時、徳川家康の軍へ旗絹を調達した。家康が会津の上杉景勝征討のため、下野小山へ着陣した時、上方で石田三成ら挙兵の報を聞き、

西上にあたって厩橋城主（うまやばし）親吉を介し、旗絹徴発の命令を受けた。そこで、領内の稼働していた手織物2410台について、一機につき一疋ずつ、合わせて2410疋の旗絹を織り出し、天神社境内へ集めて戦勝祈願の後、献上したところ家康の軍が大勝した。この吉例地を理由に慶長6年（1601年）から幕末期まで、毎年2410疋の絹織物を小物成（雑税）として納めている。天保3年（1646年）に物納であった小物成は金納に替わった。桐生地域では、旗絹の金納化により絹織物の付加価値を知って、経済意識にめざめると共に、絹織物を商品として売り捌くことになった。そして、不定期であった酉の市を六斎市とし、市場は天神社境内、市日は天神社の例祭に因んで五・九の日と決まった。こうして始まった六斎市は、絹織物の生産者と近郷からの買次商人で賑わい、やがて紗綾市と呼ばれるようになった。市場も元禄2年（1689年）からは、三丁目神社境内でも開かれるようになり、二箇所となった。これが後の上市場、下市場になったと言われている。



写真-4 木製紗綾市絵図（桐生天満宮所蔵）

⑤町名と町の特徴による分類

宿頭の天神社を、桐生領の総鎮守としたので、門前町・触元を兼ねたような形となった。しかし、館林・高崎・伊勢崎のように封建制の再編成にあたってつくられた城下町とは性格の違う在郷町である。したがって、武士団の経済を賄うような商工業は興っていない。その理由に、は下記のようなことが理由付けられる。

- ・直線状の町並みで見通しが良く、辻子も直交し軍事施設の形跡がみられないこと。
- ・周囲の町境に土居を築いているが、町の出入口に筋違い門がつくられていないこと。
- ・大名居城地に見られるような、商人町名・職人町名・職掌町名がなく、一丁目から六丁目までの番号の番号町名を採用していること。
- ・創立当初から新来者優待の町で、住民は陣屋駐在の少数の役人の他は、支配下の村々からの移住者と近郷からの入植者であり、すべて自給自

足の農民たちであること。

以上より、桐生新町は町人町でもなく在郷町として分類される。しかし、周囲は織物を作っており後に絹織物の市としても栄えたことから、産業町としても分類できると考える。

## 6. 計画思想の見方の検討

ここでは、対象地域の計画思想に関する見方の検討を行う。町割を分析するにあたり、町割を構成している要素を抽出する必要があると考える。ここで、これまで文献などで分かった史実をもとに町割の構成要素について本研究における定義を行う、また町割の分析方法を定義することで、計画思想の見方を検討できると考える。

### 1) 町割の構成要素

町割は、先にも定義したように既存の町を新たに区割りしなおし、用途区分の設定をも実施した町の区画を町割という。つまり町割には構成している要素として以下のように分類できると考えている。

表-1 町割の構成要素の分類

建築物	神社
	仏閣
土木構造物	道路
	路地
	街区
	一里塚
環境物	筋(すじ)
	樹木
	河川
	水路
工作物	井戸
	祠(ほこら)
	郭(くるわ)
	屋敷稲荷
	門 塀

以上を町割の構成要素の定義として提案したい。この分類の方法の考え方は、文化庁の伝統的建造物群保存地区調査の町割を評価する指標<sup>4)</sup>を参考に、新たに分類して著者が加筆したものである。

### 2) 計画思想の見方

これらのことを踏まえて、計画思想の見方として、まちづくりと計画の概念<sup>3)</sup>(5W1H)の観点から空間的に計画当時の意図や手法を分析する必要があると考える。そのため、町割の構成要素において絵図や史実をもとに空間軸での分析を行うことが重要であると考え。そしてこの過程から導かれたものを整理して計画思想を考察できるのではないかと考える。

## 7. まとめと今後の課題

本研究における基礎調査を行う中で、時代が江戸幕府になり代官頭大久保長安を中心に町割が行われていたことが確認できた。町割を行い、その場所に人々を移住させ、後に産業を根付かせた技術者大

久保長安の功績は大きいと考える。また、計画当初に作られた本町一丁目・二丁目・横山町は空間的特徴から、桐生新町計画当初の空間構造が現代まで受け継がれていることが分かった。そして、基礎調査を踏まえての見方の検討として古地図(絵図)を対象にGISを用いて、空間的・視覚的に町割を分析する必要があることが明確にできた。また、まちづくりと計画の概念<sup>3)</sup>(5W1H)から、町割成立当初の計画思想を分析および考察する必要があることも分かった。

今後の研究における課題として、GISを用いた古地図(絵図)の分析プログラムを構築する必要がある。また対象が絵図になるため、GISを用いる際に歪みなどが生じることからも幾何補正を行う必要がある。プログラム構築後は、現在の図面と補正図面を照合して町割を分析。そして、まちづくりと計画の概念の観点<sup>3)</sup>から、大久保長安らの計画思想を分析できると考える。また、導かれた計画思想から現代のまちづくりや地域計画および都市計画に活かせることも十分にあるのではないかと考えている。

謝辞:本研究を進めるにあたり、桐生市立図書館、桐生市立西小学校郷土資料室、桐生市都市計画課、桐生市文化財保護課には、貴重な資料等をご提供ならびに種々のご協力をいただきました。ここに、感謝の意を表記します。

### <参考文献>

- 1) 岩城卓二編:「在郷町の成立と展開—桐生新町の分析—」,国立歴史民俗博物館研究報告第95集,2003.3
- 2) 村上直:「江戸幕府の政治と人物」,p53-68,同成社,
- 3) 花岡利幸著:「実践・地方都市のまちづくり」,p35-38,技報堂出版,2006.9.20
- 4) 文化庁文化財部参事官(建造物担当):「伝統的建造物群保存地区制度のご案内・人が集い、町が生まれ、文化が育つ。」,文化庁,2006.5
- 5) 村上直:「江戸幕府の代官群像」,p3-11,p26-41,同成社,1997.1.20
- 6) 和泉清司:「幕府の地域支配と代官」,p2-25,p72-112,同成社,2001.10.18
- 7) 桐生市伝統的建造物保存対策調査会:「桐生本町の町並み」,桐生市教育委員会,1994.3
- 8) 桐生市教育委員会:「桐生のまちと近代化遺産」,桐生市教育委員会,1997.3
- 9) 桐生市史編纂委員会:「桐生市史」上中巻,桐生市教育委員会,1958
- 10) 北島藤次郎:「史実 大久保石見守長安」,p1-7,鉄生堂,1977.9.12
- 11) 橋本義夫:「大久保長安」,p1-42,多摩地方史研究団体連合会,1965.11.10